

木魚の配偶

長谷川時雨

青空文庫

木魚もくぎよの顔おほいの老爺おじいさんが、あの額おほいの上に丁字髻ちよんまげをのせて、短い体に黒ちりめんの羽織おぼあを着て、大小をさしていた姿も滑稽こっけいであつたろうが、そういうまた老妻おばあさんも美事でな出来栄きばえの人物ひとだつた。顔は浜口首相より広く大きな面積をもち、身丈みのたけも偉大だつた。

うどの大木という譬たとえはあるが、若いころは知らず、この女ひとはとても味のある、ずば抜けたばかげさを持つた無類の好人物だつた。

湯川氏うしが硫黄うしにこりだして、山谷さんやを宿とし、幾年か帰らなくなつてから、老妻おばあさんはハタと生活にさしせまつた。江戸人は瓦解がかいと一口にいうが、その折悲惨みじめだつたのは、重に士族とそれに属した有閑階級で、町人——商人や職人はさほどの打撃はなかつた。扶持ふちに離れた士族は目なし鳥だつた。狡こすいものには賺だまされ、家禄放還金の公債も捲まきあげられ、家財けざいを売り食くしたり、娘を売つたり、鎗やり一筋の主が白昼大道に筵むしろを敷いて、その鎗や刀を売つてその日の糧かてにかえた。

木魚のおじいさんの奥方も、考えたはてに、戸板といたをもつてきて、その上でおせんべを焼いて売りだした。一文のお客にも、

「まあまあ私あたしのをお求め下さいますのですか。それは誠に有難いことでございます。」

という調子で、丁寧^{しんせい}に手をついてお札をいうのと、深切な焼きかたなので一人では手が廻りきれないほど売れだした。

あまり皺^{しわ}のない、大きな顔に不似合なほど謙遜^{けんそん}した、黒子^{ほくろ}のような眼で焼き方を吟味し、ものものしい襷^{たすき}がけの、戸板の上の、道ばたのおせんべやの、無愛想なものも愛嬌^{あいぎよう}になったのかも知れない。すると、おなじ難渋^{なんじゆう}をしていた姉娘が一日手伝いに来て見ていて、翌日からすぐ隣りあつて、おなじ戸板の店を出した。もうその時は、はじめの縁に、遠州で仲人になつた旗本——藤木前^{さき}の朝^{ちよう}散^{さん}の太夫^{だいぶ}の子か孫かが婿で、その若い二人組だった。お客がくると、湯川氏の奥方^{おくがた}がお辞儀^{じぎ}をしているうちに、

「いらつしやい、こちらが焼けていますよ。」

といったふうに浚^{さら}つてゆく。客は売れるから焼手をふやしたおなじ店だと思つている。老^お奥方^{おくがた}のお辞儀は段々ふえて、売れ高はグングン減つてゆくが、そんな事に頓着^{とんじゃく}のない老嫗^{おばあさん}は隣店^{となり}の売行きを感嘆して眺め、ホクホクしている。

「お前さん方、もつと此方へお出なすつたらよい。どうも私^{あたし}の店がお邪魔なようだ。」
全くお邪魔だといわれたかどうか、とにかく元祖戸板せんべいの店は取りかたづけられた。

真面目な会話をしている時に、子供心にも、狐につままれたのではないかと、ふと、老嫗さんを呆れて見詰めることがあった。

「祖父さんも何時帰りますことかねえ。」

そこまでがほんとの話で、突然、まづは愁いとみな仰やんすけれどもなア——とケロケロと唄いだすのだった。そして小首を傾げて、

「あれはたしか、長唄の汐くみでしたっけかねえ。あの踊りはいいねえ、——相逢傘の末かけて……」

と唄いながら無器用な大きな手を振りだす。私が吃驚していると、その手でひとつ、招き猫のような格好をしておいて、鼻の下へもっていつて差恥んだように首を縮めて笑う。

布子の下の襦袢から、ポチリと色褪めた赤いものが見えるので、引っぱりだして見ると、黒ちりめん牡丹の模様の古いのだった。綴ぎ綴ぎで、大きな二寸もある紋があった。

おばあさんの父親安芸守は、白河で切腹したとき、上野の法親王にはお咎めのないようにと建白書のようなものを書いたのだときいていたが、おばあさんに正すと、遠い昔の物語りでも聞くように目を細めて、そうですよそうですよというきりだった。

「戦争なんて、もうもういやなこと、いやなこと、真っ平さね。」

プツリと言いきつて、狐きつねつきのようにだまり込んでいる。背を丸く首を傾かしげた姿を見るとどんなに世の荒波がこの善人を顛てん動させ、こうも呆ぼけさせたかと痛いたましかった。

私はこの老女ひとの生母ははおやをたつた一度見た覚えがある。谷中やなか御隠殿ごいんでんの棗なつめの木のある家で、蓮池はすいけのある庭にむかった室へやで、お比丘尼びくにだった。

老年になつてからこの夫妻は一緒に暮す日が多くなつた。

ある日空巢あきすねらいがはいつた。おばあさんはキョトンとした眼で見えていたが、立つていつて座布団ざふとんを出した。盗棒どろぼうはびつくりして、落つかないお尻しりを布団の上にのせたが、お茶を出されてモジモジした。

「あいにく留守にしたあとで、私あたしでは何のお役にもたちませんで——どうぞ、ごゆるりとなさつて下さいまし。」

盗人どろぼうは飛上つて次の間へゆき、グルリと見廻して出て来た。

おばあさんはいよいよ真面目で、

「ただいまお菓子をとつて参りますから、ちよつとどうぞお待ちを——」

盗人は狼狽^{あわ}てた。外へ出られてはたまらない——彼の方が一目散^{いちもくさん}に飛出すと、おばあさんが後から、

「もしもし貴下^{あなた}、おわすれものですよ、なんておそそうな——」

そう言つて着せてやつたのは、毛皮のついた外套^{がいとう}だった。

湯川氏が帰るとこの老妻は、盗人を笑つた。

「なんてまあ、狼狽^{あわて}たお客さんなのか。ねえおじいさん。」

「その人は何の用で、何処^{どこ}から来た？」

「それを私が知りますものかね。老父^{おじい}さんが御存じじやありませんか。」

「私が^{わたし}なんで知るものかね。」

「へえ？ それは不思議だ。私はまた、貴夫^{あなた}のお客さまだから、あなたが御存じだと思い

ましたよ。」

老人は壁を見ていった。

「私の外套^{がいとう}がないよ。」

「おやまあ嫌だ、あなたが着てお出^{いで}になったのに——おじいさん老耄^{ろうもう}なされた。」

「ばか言え、わしは着てゆかない。」

ふと老父さんは、老妻が丁寧にお辞儀をしている頭のさきを、盗人^{どろぼう}が、自分の外套をきて出てゆくのを思いうかべた。そして淋しい顔^{さび}をして、私^{あたし}のところへいつけに来た。誰かが、不用だといったインバネスが、身長^{たけ}の短いおじいさんの、丁度よい外套になりはしたが――

私の父は晩年^{つくだじま}を佃島^{あいおいばし}の、相生橋^{はしのほとり}畔^{はた}に小松を多く植えて隠遁^{いんとん}した。湯川氏夫妻もおなじ構^{かまえうち}内に引取られた。七十代の婿^{むこ}と八十代の舅^{しゅうと}とは、共に豊鑠^{かくしやく}として潮風に禿^{はげ}頭^{あたま}を黒く染め、朝は早くから夜は手許^{てもと}の暗くなるまで庭仕事を励んだ。二人とも、何が――と。

一人が嶮^{けわ}しい山谿^{やまあい}を駆^{かけ}る呼吸で松の木に登り、桜の幹にまたがって安房上総^{あわかずさ}を眺める、と、片つぽは北辰^{ほくしん}一刀流の構^{かま}えで、木の根つ子をヤツと割るのである。寒中^{みずつば}など水鼻^{みずな}汁^なをたらしながら、井戸水で、月の光りで鎌^{かま}を磨^といでいたり、丸太石をころがしていたりする。日和^{ひより}のよいころ芝を茹るときは、向うの方と、此方のほうで向いあいながら、

「いや、手前一向に武芸の方は不得手でげてな。」

「いや、剣法でもなんでもあのコツだ。どうして、霧にかくれるというが、あなたの豁谷^{たに}

を渡るあれだ、あの※吸といったら、實際たいしたものだ。」

「いやどうも、そう仰しおつやられては汗顔のいたりだ。」

——だが、私が松の木の上にいる父を、老人としよりの冷水ひやみずだとよびにゆくと、小さな声で、

「じいさんはやめたか？」

と訊きく、湯川老人の方へゆくと、

「や、もう、お父さんの若いこと若いこと、感服のいたりだ。」

と腰をのばす。この、老おいたる婿しゅうとめと、舅しゅうとめと姑とめが、どうした事か、毎日の、どんな些さ少な交まじ渉

でもみんな私のところへ、一々もつてくるのだった。三人の老人が、年寄らしいイゴで三

すくみのかたちで、不平ふようも悦よろこびも感謝も、みんな私のところへもつてくる。

「婆さんが腰をぬかして——なんともうす腑ふ甲が斐いない女やつか。」

湯川老人がそう言つてゆくと、入いれ代かわりに父が来て告げる。

「祖母ばあさんが築つき山やまに座つて、祖父じいさんに小言をいわれている。早く行つてやれ。」

おばあさんは私の顔を見ると言つた。

「あたくしはね、あたくしのお墓を見てびっくりいたしましたのですよ。私は生きてるのか、死んでるのか分りませんでね。」

やつと分つた。荖ふきを摘つみに来たおばあさんは、寒竹かんちくの簍やぶの中に、小犬を埋めたしるしの石を見て呆然ぼうぜんとしてしまったのだつた。

またある日、湯川老人が私の前に言いわけなさそうに立つた。

「ばあさんを、ちと、悪くしてしまひましてな。」

小さな眼をパチパチと伏せた。あとから離れの住居へいつてみると、身寄りの男たちが二、三人いた。彼らは具合わるくモズモズした。

おばあさんの体が生しょうたい体なくグニャグニャになったというのだ。レウマチで関節の自由がよくなかつたので、台湾からよい薬を持って来たから飲ましたのだといった。それならば暗い顔をする訳はないがと思うと、効ききすぎたのだとまた言つた。それは湯川氏の婿の一人の土族で、官吏をやめて日清戦争に台湾に従軍し、そのまま居つてしまった土佐弁の、日本人ばなれのした人だつた。

「台湾あちでは、チトチトやつてもよく効くのを、おばアさん一いつとき時に飲んだでナア、いや、別に、悪いもんでも、叱られるよな薬でもないが、チト強いでナア。虎の血と、蛇と——もひとつ……」

猛獣の血と蛇の何かと、もひとつのものを乾し固めて粉にしたのを持って来て、分量は

とにかく、八十上の老女に飲ませようとしたガムシヤな勇氣におどろいてしまった。

肝心なおばさんはモガモガこんなことを言つた。

「とろけてしまふなんて、まるで惚れた^ほようで意氣ですこと。おやつちゃん、あたくしや葡萄酒^{ぶどうしゅ}でのみましたよ。」

なにしろ死んだら牛肉^{ぎゅう}のおさしみを仏壇へあげてくれという人だったから、私は驚きもしなかつた。

一年ばかりたつた夏の朝、私の寝ている茶座敷の丸窓を、コツコツ叩く^{たた}ものがある。戸を一枚ひくと、老人が、

「ばあさんがどうも変で——」

そう言つたなり、竹箒^{たかぼうき}をひいて、さつさと木の間に^まかくれて去つてしまった。

暁^{ぎょうあん} 闇^{はき}が萩のしずれに漂つていた。小蝶^{いくつ}が幾羽もつばさを畳んで眠つていた。離家^{はなれ}の

明けてある戸をはいつてゆくと、薄暗い青蚊帳^{あおがや}の中に、大きな顔がすっかりゆるんでいた。

も一足早ければ、何か秀逸な遺言を残したであろうに——枕^{まくら}許^{もと}に、まだよく色つか

ぬ柿が、枝のまま籠^{かご}に入れてあつた。おじいさんの心づくしであつたろう。

おばあさんな老妻が歿なくなると、老爺おじいさんの諦あきらめていた硫黄熱あきがまた燃てきた。次の間にはもう寝ているものがない、広々した住居に独りでポツネンと机にむかつて、精密な珠算と細字とが、庭仕事の相間あいまに初まり、やがて庭仕事の方が相間にされるようになった。薄すすきの穂が飛んで、へやのなか室むろ内の老爺さんの肩に赤トンボがとまろうと、桜が散り込んで小禽ことりが障子につきあたって飛廻つても、老爺さんには東京なのか山の中なのか、室内なのか外おもてなのか、ムツリとして無愛想になつてしまった。

だが、もうさびしい諦めはもつていたと見えて、山へ行くとはいひださなかつた。たつた一度そうした望みを洩もらしたおり、私は出してやりたかつた。山で死ぬのが彼にはいいと思つたが、彼の親類は困ると言つた。それから急に年齢としの衰えが来た。離家はなれの垣根の隅でポツチりずつの硫黄を製煉し、研究している姿が墓ひきがえるのように悲しかつた。

私ひとりを使たよりにでもしているように、私がものを書いてゐる窓に來て一言二言ずついつた。野球のミットのような掌てのひらを広げると、土佐絵に盛りあげた菜の花の黄か——黄色い蝶をつかんできたのかと思うほど鮮かな色があつた。

彼の試練からとれた硫黄だつた。

「これをひとつ、お見せくださらんか。」

老爺さんの頭には、その時、時の知名の成功者たちの名がうかんでいたに相違なかった。実業家や学者にもお近づきがあるでしょうから。」

鮮かな黄色は、私の黒ぬりの机の上にこぼれた。老爺さんは懐ふところから部厚な書きものを出した。

硫黄採煉明細書と版に彫ったように正しく表おもてがき書きがしてある。

「硫黄は釜かまが痛むものでしてな。」

と老爺さんはやつと発明した製煉釜のことを手真似で話した。私は老爺さんの心根を思つて、駄目と知りながら知己ちきの鉾山所長にその明細書を見せたら、その人は首を振つていった。

「惜しいことにみんな外国で発明しられてしまっている。機械はもつと簡便に出来る。だが九十の老爺さんが、よく実地から此処ここまで考えたものだ。」

私は九十の老爺さんが以下だけを使つて、パスしなかつた事はきかさなかつた。彼は恐きようえつ

悦よろこの至りだと言つた。

明治四十三年の九月に佃島つなみに津波が来た。京橋の築地河岸がし一体にまでその水は押上げたほどで、洲崎すいぎや月島は被害が甚ひどかつた。庭の眺めになるほどの距離にある相生橋から越中

島の商船学校前には、避難して来ていた和船^{わふね}が幾艘^{いくそう}も道路に座ってしまったほどで、帝都には珍しい津波だった。私の家^{あたしうち}は老人たちの丹精の小松が成長して、すっかり根をかためていたせいか防波堤^ては崩れなかった。海水^{みず}が高いと案じ油断^{ゆだん}はしていなかったが、うとうと眠った夜中にチョロチョロと耳近く水の音をきいた。戸外^{そと}の暴風雨^{あらし}にはまぎれぬ音なのですぐに目が覚めた。潮入りの池は島中でたったひとつだから、これは池があふれたな、近所に気の毒だとその瞬間に思ったが、よく目を覚すとそれどころではなかった。何もかもが浮出して器物が活動している。ボンヤリしているのは人間だけだった。

電燈^{たんだ}は断れた^{さいわい}。幸に満月の夜ごろだから、月はなくても空は真暗というほどではない。離家から、二階にいた中学生の弟が裸で、胸まで水に浸って、探險用の燈火^{あかり}をつけてやってきた。二匹の犬がザブザブ泳いで後について来た。

「老爺さんをとにかく二階へあげておくれ。」
「というと弟が答えた。」

「とても駄目だよ、おやつちゃんでも言わなければ動きやしない。なんてったって、戸棚の前に座って、硫黄をいじくってる。」
「でも水で大変だろう。」

「うん、床が高いけれど、座ってる胸のところへ来ている。」

「硫黄をみんな二階へあげてあげるといつておくれ。」

「こつちへ連れて来たいが、老人としよりだから流されるだろう、とても甚ひどいや、僕でもあぶない。」

私は突とつ嗟さに富士登山の杖つえが浮いてるのをとつて、窓の外そとの弟にわたした。

水が引いたあと、ヘドロを掻かくのと、濡ぬれた衣きもの物や書籍が洗いきれずに腐くさつて、夜になると川へ流して捨てた。壁は上までシケが浸しみ上あがっていった。額などは水につかりもしないのにパクパクして、何もかもが病氣になった状態だった。私は二人の老人の健康を氣づかった。

離れの二階が一番乾いていたのと通風がよいので、みんなが其そこ処に集つて暮すと、二人の老人はまた互に強がりはじめた。しかし、二人ともどこか悪くしている様子が見えた。私は七十代の父の方に説いた。

「どうも老爺さんが悪いらしいが、医者をやぶというとかからないから、お父さんが風邪をひいたことにして——」

「よし。」

老父は至極簡単で、もの事を逆にいえば唯々いいたくなく々々なのである。

「なにしろ湯川老人は年齢としだからな、医者に見せなければいけない。」

そして、その湯川老人はいった。

「ようござ、お父さんは頑固だからどうも強がつていけない。僕が医者にかかるというと、自分のためだとは知らずに、湯川もまいったなと言われるだろう。だが、なんぞ知らん、長谷川うじ氏のために呼んだ医者だ。」

カラカラと笑ってつけたした。

「幸と硫黄はなんともなかった。書物かきものをすこしやられたが、それはまた書けば書けるから、どうか御安心ください。」

だが、死期はせまっていたのだった。保もてるだけもった体は、ポクリと倒れるまで余命を保っていただけだった。医者は言った。何ともないが死ぬだろうと、しかも十日はどうかと――

葬式にも間に合わないだろうがと、台湾から出て来た例の虎と蛇薬の婿は、蚊にさされながらブツブツ言った。

「こんな事なら、わしや言うとかにやらぬことや、仕ておかにやらんことが沢山沢山

あつたに——おじいさん、どこまで他人を困らせる人か、わしやもう、若いころからこの人のためには、ほん、サンザンな目に逢うとるわ。」

医者も驚いた。こんな事はないがと——そのくせ死期は来ているのだが。

「おじいさん癌があつたのだね、驚いたなあ、何時ころからなんだ。」

医者にもわからないものが、誰にも分りようはなかった。強い、しどい、刺戟のある臭気を、香を焚き、鼻の穴へ香水をつけた綿を挿て私が世話をする、その時だけ意識が分明して、他の者には近よらせなかった。そしてお世辞がよかった。

何に拘わっているのか——と私は考えた。

「おじいさん、お酒がほしい？」

ニコリとしたような表情だ、私は薬指のさきに、薄めた清酒をつけて嘗めさせるとおちよぼ口をした。

「ほう、観音様だな。」

傍から首を出した妹を見てお世辞をつぎたした。

「イヨウ、綺麗になりやがあつたな、弁天様だぞ。」

酒をもひとつというように口をあけた。そして露を吸うように、垂らされる雫が舌のさ

きに^{すべ}に^へると、

——富士の、白さけ……

と幽^{かすか}な声で転がすように唄^{うた}った。正^{まさ}しく生^まているおりなら、笑^えみくずれるほどに笑^えったのであろう。唇^{くち}をパクリとした。

でも臨終ではない。ああ結構な、いい往生^{おしょう}ですいい往生^{おしょう}ですと寄^よつて来^きたものはポカンとして当惑^{たうわく}した顔をした。

私の心は暗^くかった。長い一生、一念^{いつげん}を封^{ふう}じこめた硫^{りゅう}黄^{わう}山^まに心^{こころ}を残^{のこ}しているのではあるまいかと。

「老爺^{おやう}さん、硫^{りゅう}黄^{わう}鉾^ま山^まが売^うれましたよ。」

「ほ。」

パツと、死^しんだ瞳^{ひとみ}に瞬^ひ間^ま灯^{あかり}がともった。手^てを差^さ出した。そこらにあ^あつた重^{おも}いもの^{もの}を掴^{つか}んだ手を私は老爺^{おやう}さんの手^てに触^ふれさせた。

「有^あ難^{なん}い——みんなにや^やつてくれ。」

私はほほえましくお伽^{とき}噺^{ばなし}のよう^{よう}に言^いった。

「老爺^{おやう}さんの黄^{きん}金の像^{ざう}を建^たててあ^あげましよう。」

「ほ。」

満足な瞑目めいもくだった。

厳粛にしゃちこぼった人たちの方がすぐに悪口した。欲ばっていると――
私にはそう思えなかった。

初秋の風に竹がサラサラ鳴る暁、ひつぎ 柩は出てゆくのだった。戒名は硫黄居士こじと私がつけたが、親類の望みで二字に離してくれというので、硫石黄竹居士になった。私は臨終に嘘をついたのを、今でもちつとも悪いと思っていない。私はみんなが、さまではというのに反対して、黄竹居士湯川老人の柩の中へ、標本になっていた硫黄の、ありったけの種類をすこしずつ入れてやった。これほどの供養はないと思っている。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

木魚の配偶

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>